

模の塔跡であることを確認。また南面回廊も検出し、当伽藍は最古の法隆寺式伽藍配置の可能性が高まった。

(巽淳一郎)

(現地説明会) 4月27日飛鳥藤原第84次(飛鳥寺東南部)島田敏男
3月14日飛鳥藤原第89次(吉備池廃寺)佐川正敏

平城京の調査

1997年度に平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査は平城宮跡7件、平城京跡20件、京内寺院・その他3件で、計30件におよんだ。このうち、学術発掘および史跡整備にともなうものは7件3,768m²、住宅建設等による緊急調査が23件4,838m²と、緊急調査の比重が大きい一年であった。おもな調査の成果は以下の通りである。

平城宮跡では、式部省東方の東面大垣(第274次)、東院園池とその周辺(第280次・第283次・第284次・第286次)など、宮の東南部に調査が集中した。第274次では、宮内基幹排水溝から東一坊大路西側溝へ流れ出る溝によって、東面大垣が途切れていた時期のあったことが判明した。第280次では、東院東南隅にあって隅楼といわれてきた特殊な平面をもつ掘立柱建物の全容をつかみ、第284次では、東院園池南岸および二条大路北側溝の様相をあきらかにした。宇奈多理神社境内でおこなった第283次では、基壇建物の石組雨落溝を検出し、その東の第286次では、東面大垣西壁(宮内側)の建設用堰板痕跡を検出するなど、画期的な発見が続いた。

一方、京城では左京二条二坊十一坪周辺(第281次・第282-10次・第282-16次・289次)と、右京三条一坊三・四坪(第288次・第290次)で、比較的大きい調査をおこなった。前者では、二条条間路の南北両側溝をはじめとする条坊遺構のほか、法華寺の寺域にひらくと想定される礎石建の門、十一坪の北辺にひらく掘立柱棟門を発見した。また、坪内では既調査区と連続する掘立柱建物を検出し、十一坪は十二坪と一体で2町占地のブロックである可能性が高くなった。後者では遺構が希薄なもの、朱雀大路西側溝周辺の様相をあきらかにした。第282-11次・-12次・-13次では、市庭古墳の周濠と周堤を検出し、旧大乗院庭園北岸の調査(第285次・第287次)では、近代の地形造成が予想よりも大規模で、近世以前の汀線はさらに北にのびることをつかんだ。そのほか、阿弥陀浄土院推定地(第282-6次)、長屋王邸(第291次)

などで調査をおこなった。

以上の調査成果の詳細については、年報Ⅲを参照されたい。なお、発掘調査にともなう現地説明会は、以下の日時に開催した。

(箱崎和久)

6月14日 平城宮第274次(東面大垣) 山下信一郎
12月6日 平城宮第280次(東院南東隅) 内田和伸

建造物の調査と研究

南都を中心とする古代建築の調査研究 従来から継続している本研究は、とくに現在は、これまでに蓄積された調査研究と保存修理工事の成果をもとに、古代建築の設計計画や工法からみた軸組・架構・小屋組の構造、各部位の計画寸法、各部材の長さと大きさ、樹種、納まりなどの研究をすすめている(P.20-21参照)。また、東大寺転害門の実測をおこない、技法、復原考察、修理手法などの研究をおこなった(P.24-25参照)。

遺跡の建造物復原方法の研究 都道府県の協力を得て収集した史跡の建造物復原事業の実態アンケートから、事業のあり方、復原のあり方などについて問題点と課題を整理分析した。それらの成果をもとに、各地の自治体の担当者を交え、今後のあり方を討論した(P.62参照)。

平城宮建物復原実施にともなう調査研究 大極殿の復原実施設計準備に関する監修において、古代建築の技法および復原実施上の諸問題などの検討をおこなった(P.69-70参照)。朱雀門・東院西建物の復原施工の監修では、材料の選択、原寸図作成並びに木材加工、瓦の原型作製などの機会に細部の検討をおこなった(P.68参照)。

滋賀県近世民家調査 3か年継続事業の最終年度となり補足調査をおこない報告書を作成した(P.28-29参照)。

鳥取県近代化遺産総合調査 2か年継続事業の最終年度にあたり、第二次調査と補足調査をおこない、報告書を作成した(P.65参照)。

建造物保存修復の理念及び方法に関する日独共同研究 ドイツの二か所(ザクセン州マイセン市・ヘッセン州リンブルク市)で都市の保存地区について、歴史的な建造物の保存、修復、活用などの状況を調査した(P.50参照)。ドイツからも研究者を招聘し、樫原市今井町その他の調査に協力した。

各地の史跡の整備事業(建物復原)への助言・指導 新居関(新居町)、崇廣堂(伊賀上野市)、近江国庁(滋賀県)、津山城(津山市)などの遺跡整備における建物

復原に関する助言・指導を現地においておこなった。

各地の文化財建造物の修復事業への助言・指導 光福寺（静岡県）、大阪中之島公会堂（大阪市）、山口県旧県会議事堂（山口県）、釣島灯台退息所（松山市）、西田橋（鹿児島県）などの保存修復にあたり、現地において助言・指導した。
（木村 勉）

書跡資料の調査

南都諸寺所蔵の典籍文書の調査は、前年に引き続いで薬師寺、興福寺、法隆寺について調査を実施した。薬師寺は、経箱第25～28函について調査をおこない、第22、23函を写真撮影した。調査と併せて、DB化も第23函までおこなった。全体の調査はまだ終了しないが、次年度で、調査終了分については区切りをつける予定である。興福寺は典籍文書目録第三卷分にあたる経箱第61函以降である。現在調査中の箱は、第61、69、70函の調査をおこなっている。法隆寺は、記録文書の目録作りであるが、概ね出来上がりに近づいている。

南都以外では、仁和寺の御経蔵目録の第1分冊を、管理調査用の稿本として作成しつつある。現在調査は、文化庁や科研調査に協力するかたちで、奈文研及び奈文研OBが数人参加しているが、従来奈文研が調査してきた成果を資料の管理調査用に活用しようとするものである。その他、醍醐寺文書、石山寺聖教の調査をした。また、文化庁や教育委員会の依頼を受け、奈良東大寺修二会関係資料、滋賀永源寺文書、京都興聖寺一切経、東福寺文書などの調査に協力をした。

北浦定政関係資料では、北浦宅での補足調査や「平城旧址之図」の写本の調査をした。
（綾村 宏）

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの6研究室と情報資料室および各人がそれぞれの課題を定めて進めている研究があり、多くは前年から継続しているものである。1997年度には次のものがあり、そのうちのいくつかについては別頁で報告している（＊印）。ここでは他のもののいくつかを紹介する。

全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究/文化財情報ネットワークにおける通信法の研究/遺跡地図構報システムの開発研究/縄文編年の学史的研究/東アジア古代都城の比較研究*/古代地方末端官衙

遺跡の調査研究/古代倉庫遺構の集成的研究/古代豪族居館遺跡の研究/動物遺存体による生業活動の復原的研究/遺跡土壤の微細形態学的研究/残存脂質分析による生活環境の復原的研究/古気候の復原的研究/年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明/年輪年代法による弥生・古墳時代開始時期に関する研究/広域遺構探査法の開発研究*/東アジア古代の庭園遺構の比較研究/文化遺産の地域特性に関する研究/復原建物の構造安定性に関する研究/常時微動測定による古建築の構造に関する研究*/金銅製造物の保存科学的研究/飛鳥・藤原・平城宮跡等出土品の保存処理/東アジアの古代塑像・壁画の技法的研究/有機質遺物の材質分析とその保存処理法の開発研究*/劣化写真のデジタル画像による復原/解析図化システムによる文化財計測法の開発/南アジア仏教遺跡の研究/発掘調査支援機械システムの開発研究/陶磁器文化の交流に関する科学的研究/日韓古代における埋葬法の比較研究

埋蔵文化財関係情報処理の現状 奈文研ホームページは、研究所による現在までの調査研究成果の公開と、平城宮跡の現況の紹介に特に力を入れて整備を続けていいる。外部からのアクセス件数も1ヶ月1000件を越えており、また、電子メールでの質問も受け付けているので、一般の人々に対する文化財の調査研究についての情報公開に大きく貢献していると考える。

全国不動産文化財情報システムの現状 インターネット経由でのデータベースの公開を始めた。校正用のシステムでは本年度も遺跡情報の収集を続け、データの変更・更新を行っている。要望の多い画像情報の取り込みについては、どのようにして実現するか、システムの検討を行っている。膨大な遺跡数を前にたじろぎながらも前進しているというのが実感である。

年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明 中国北東部にそびえる長白山一白頭山（2,744m）の噴火による火砕流で埋没したマンシュウカラマツ樹林の炭化材のもつ年輪から、その噴火年代を明らかにしようとする研究である。10世紀に噴火したとされている白頭山の噴火年代が確定すれば、渤海国滅亡との関係の有無や、その火山灰がわが国の東北、北海道へ飛来してきて遺跡に堆積していることから、それらの遺跡年代確定にも大いに役立つことになる。目下、中国科学院瀋陽応用生態研究所と共同で進めている。

金銅製造物の保存科学的研究 金銅製造物のうち鍍金製品の鍍金層は数十ミクロン以下の薄層により形成されている。これらの保存にあたり、高吸水性ポリマーを利用したさびの除去が可能となり、また、多くの鍍金遺物の非破壊測定が可能となった。しかし、従来からの蛍光X線分析法ではX線的に無限層厚試料が定量条件となるため、出土遺物に適用することが困難である。本研究は平